

---

# 5人の高校生活

月形 竹保

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

5人の高校生活

### 【Nコード】

N7741W

### 【作者名】

月形 竹保

### 【あらすじ】

コナンと哀を中心に始まった、5人の高校生活。

またも、クラスは分かれることもなく、仲良し5人は探偵部を始めようとするが…。

## プロローグ（前書き）

初投稿です。

一話目なので、人物紹介でほぼ終わってしまいました。  
では、ご覧ください。

## プロローグ

新一からコナンとなって一年。  
FBIと協力し、組織は壊滅へと追い込んだ。  
しかし、哀とコナンの望んだAPT X 4869のデータは、組織によりメインコンピュータが破壊されたことで、手に入れられず、解毒剤の研究は頓挫してしまった。

そのまま、数年が経ち、帝丹高校入学式当日。

いつもの交差点に向かう二人。

「あつ！コナンくん、哀ちゃん！おはよう。」

大きな声で挨拶してくるのは、吉田歩美。人当たりのいい性格で、誰からも好かれる女の子。胸くらいまで伸ばした真っ直ぐな髪を、両耳の上でヘアピンでとめている。

黒目がちな瞳が可愛く、男子からは絶大な人気を誇っている。  
高校入試を上位の成績で突破した才媛でもある。

「おはようございます。遅いですよ。お二人共。遅刻したらどうするんですか！！」

と、呆れた顔をしながら話しかけてきたのは、円谷光彦である。

歩美の右横に立つ、長身でそばかす顔の青年。

敬語で話すのは昔から変わらず、礼儀正しいと、上級生の女子から、

絶大な人気を誇る。歩美同様、入試を上位で突破した頭脳明晰さである。

歩美の左横からは、

「おっす！おせーぞ、お前ら！！早く行こうぜ。」

と叫ぶ、小嶋元太。

ガツチリとした体躯は、中学から始めた柔道に因るものだ。

無駄の無い、しなやかな筋肉で引き締まっている。その見た目と、大らかな性格から、男女問わず下級生から人気がある。

3人に答えるように、

「よお、わりーわりー。博士が哀の制服姿を写真に撮りたいってきかなくてな。」

といったのは、古びた黒縁眼鏡を掛けた江戸川コナンだ。

容姿端麗、頭脳明晰、スポーツ万能と、三拍子揃った上に、紳士で優しいと、年齢関係なくモテ、その推理力は、警察関係者からも一目置かれる。

4

コナンの横を歩きながら、疲れたように、

「おはよう。全く、博士にも困ったものだわ。」と呟くのは、灰原哀。

白く透き通るような肌に、翡翠の瞳、赤茶のウェーブがかかった髪は肩口で切りそろえている。

誰もが振り返るような美貌だが、その瞳は冷めていて、人を寄せ付けようとしない。

才色兼備で、スポーツも得意。人見知りをする性格故か、クールビユーティイと言われるが、男子からの人気は高い。

## プロローグ（後書き）

何だか、分かりにくいですね。

誤字、脱字と気づいた方は、知らせていただけると有り難いです。  
次話もよろしくお願いします。

## クラス分けとこれから（前書き）

今日、2度目の投稿。  
あまり先に進まない…。

## クラス分けとこれから

帝丹高校へ向かった5人は、クラス分けの掲示板前で固まった。

「……………」

「これで10年連続同じクラスか。何か怖いな。」

「え〜？コナン君、コレはもう、奇跡だよ!!」

「そうですよ。神様が5人は分けてはいけないうって言うてるんですよ!」

「少年探偵団は不滅だな!!」

「はあっ。とりあえず、教室に行きましょう。」

哀の言葉で、教室へと向かった。

当然のように、コナンと哀は隣同士に座り、その前に、歩美を挟むように光彦と元太が座った。

入学式は滞りなく過ぎ、放課後。

5人は一緒に帰りながら、これからのことを相談することにし、通りがかったファーストフード店に入り、昼食を食べることになった。

それぞれ食べたいものを注文し、ひとまず食べてしまうことにした。みんなが食べ終わり、歩美は話を切り出した。



「ねえ、部活なんだけど、【探偵部<sup>クラブ</sup>】を立ち上げない!？」

「え?俺、柔道推薦で来てるから、柔道部に入るぞ?」

「元太君は、兼部って形を取れば大丈夫じゃないですか?」

「推薦で入った奴が兼部ってありなのか?」

「そうね、ちよつと難しいと思うわ。」

「え?そうなの!?じゃあ、どうしよう…。5人いないと部にならないのに。」

「同好会じゃダメなの?」「哀ちゃん…、だって、格好良くないんだもん。」

「だったら、同好会ってつけなきゃいいんじゃないか?」

「そうですよ。【探偵倶楽部】ってするのはどうでしょう?」

言いながら、光彦は紙とペンを取りだし、【探偵倶楽部】と書いてみせる。

「それなら格好いいかも!でも、元太君がいないんじゃない、淋しいね。」

「それについては、俺と哀で先生に掛け合ってみるよ。」

「要は、先生を言い負かせばいいのよね。歩美ちゃん、安心して。どうにかしてみせるわ。」

「わ~い。哀ちゃん、コナン君、よろしくね。」

「ところで、2人とも、高校では、2人が付き合ってること、公にするんだよね?」

「「え…?」」

「あ〜っ!やっぱり、黙ってるつもりだったんだ。」

「いい加減、公表しちゃえばいいじゃないですか。何を躊躇ってるんですか?」

「そつだぞ。言っちゃえば、ラブレターも呼び出しも無くなるんじ

「やねーか？」

「まあ、そうなんだよな。哀、公表してもいいか？そうすれば、俺も嫉妬で狂いそうにならなくてすむだろうし。」

「コナン…。そう、そうね。私も、もう嫉妬で胸を痛めるのは辛いわ。」

「良かった。これでみんなに訊かれても、無理に誤魔化す必要ないもんね。」

「良かったです。僕たちも良心が痛まなくなります。」

「よし！明日からは訊かれたら、小2から付き合ってるぞって言うからな。」

「ああ、頼むよ。」

「よろしくね、みんな。」

## クラス分けとこれから（後書き）

読んでいただき、感謝です。

次も出来るだけ早く書けたらいいと思います。

## ガールズトーク(前書き)

女の子同士の会話は、なんだかちょっと難しい。

途中で回想シーンが入ります。

## ガールズトーク

「あつ、やべえ！俺、1時から、柔道部に顔出すんだった！！わりいけど、俺行くな。明日な。」  
と元太は急いで荷物をまとめて走っていった。

「じゃあ、解散にする？」

「そうですね。僕たちは帰りましょうか。」

「あ…、あのさ、コナン君、ちょっと哀ちゃん借りてもいいかな？」

「え？まあ、構わないけど。どうした？」

「コナン！！！」

強めに名前を呼ばれ、驚いて哀の方を見ると、節目がちに首を横に振っていた。

コナンは、

『ああ、光彦のことか。』

と一人で納得し、頷く。

そして、

「じゃあ、俺も光彦に話があるから、ここで分かれよう。哀、後でな。」

「ええ、後でね。円谷君、また明日。」

「はい、歩美ちゃん、灰原さん、また明日。」

コナンと光彦を見送って、改めて哀の方に向き直り話し出す。

「哀ちゃん、私ね、光彦君に告白しようと思うの。」

「そう。」

「うん、だって、もう待つのは疲れたもん。」

「小嶋君に1個下の彼女が出来たんだから、遠慮しないで言えばいいのに、煮え切らないのよね。」

「私も、光彦君も、同じ経験をしてるから…。」

「え？同じ経験??。」

「うん。私さ、コナン君のことが好きだったでしょ？あの頃、光彦君は、哀ちゃんが好きだったんだよ。」

「ええ、そうだったわね。」

「でも、2人が付き合い始めて、気付いたの。あれは、恋じゃなかったって。」

「恋じゃない?。」

「うん。アレはね、憧れだったの。自分とは違う世界を持った人に対する憧れ。彼といれば、私も同じ世界を見れるんじゃないかってね。」

「円谷君も?。」

「たぶんね。あの当時、コナン君も哀ちゃんも、すごく大人びてた。一緒に居ても、二人だけは違うものを見る気がしてたの。」

「まあ、あの頃はね…。」

「だから、2人が付き合うことにしたって聞いたとき、ショックだったけど、納得できたの。」

「あの後も、変わらず接してくれたものね。」

哀はあの日のことを思い出して、優しい笑みを浮かべていた。

~~~~~回想~~~~~

小学2年の冬。

組織壊滅の少し前、コナンは、哀に気持ちを告げた。

勿論、蘭には多少の嘘を交えて説明し、気持ちが他に向かったこと

を告げてからだ。

哀は、蘭に促され、素直な気持ちをコナンに伝えた。そうして、2人は付き合いだしたのである。

告白の翌日、学校に行く道すがら、探偵団の3人にその旨を伝えた。その時の歩美と光彦の顔は、一瞬、悲しみに沈んだが、次の瞬間には、いつもの笑顔を見せていた。

「そっかあ、やっぱりね。そんな気はしてたんだ。歩美は、2人を応援するよ！だって、2人とも同じくらい大事だもん。」

「そうですね。僕もお二人はお似合いだと思います。応援しますよ。」

「だよな！俺も、おまえら二人はくつつくと思ってたぜ。」

「みんな…、ありがとう。」

哀は少し涙ぐみながら、笑顔でお礼を言って、コナンと指を絡めた。

コナンは、そんな哀の指をしっかりと握り、

「サンキューな。」

といい、嬉しげに顔を綻ばせた。

~~~~~回想終了~~~~~

「ふふつ。思い出しちゃったね。」

言いながら、ペロツと舌を出した歩美に、

「ええ、良い思い出よ。」

と微笑み返した。

まじめな顔に戻り、

「歩美ちゃん、たぶん、コナンが今頃、円谷君に説教してるわよ。早く告白しろってね。」

「えっ!?!」

「実はね、彼には言っていたのよ。歩美ちゃんが悩んでることを。それでね、せっついて頂戴ってお願いしておいたわ。」

「哀ちゃん…。」

「だからね、あなたから告白はしないで平気だと思っわ。」

「本当!?!ありがとう、哀ちゃん!大好き!」

「お礼は、ちゃんと告白されてからよ。」

と言うと軽くウィンクをした。

そして、2人は、軽い足取りで店を後にした。



## ガールズトーク（後書き）

如何でしたでしょうか？

自分、女なのに、ガールズトークを書くのに苦労しました。  
というか、会話自体が難しいです…。

次は、同じ時間軸で、コナンと光彦の会話です。

## 迷いと決意（前書き）

予告通り、前話の時間軸で、男の子同士の会話です。

## 迷いと決意

歩美と哀がガールズトークをしている頃、コナンは光彦を連れて、近所の公園に来ていた。

空いていたベンチに座り、真剣な表情で話し始めた。

「なあ、光彦。高校にも無事入れたしさ、そろそろケジメをつけな  
いか？」

「何の話ですか？」

「歩美ちゃんだよ。気付いてるんだろう？歩美ちゃんが誰を好きなのか。元太だつて悟つたんだ。オメエが気付いてないはず無いよな  
？」

「コナン君…。そうですね。元太君は、僕を気遣つて、下級生と付き合  
いだしたんですよね。」

「ちよつと違うな。あれは、タイミングが良かったんだ。元太は、  
中学に上がる頃には、歩美ちゃんのこと諦めてたよ。オメエをせ  
つুকのために敢えて、諦めてないフリをしてたんだ。」

「そんな…。」

「まあ、やつと気付いたんだろうな、それが逆効果だつたつて。だ  
から、前から気になつてた後輩の告白を受け入れたんだ。」

「そうだったんですか。それなのに、僕が行動に移さないから、内  
心、呆れてるんでしょうね。」

「呆れてると言うよりは、怒ってるかもな。」

「僕はどうすればいいんでしょうか？」

「どうするもこうするもないだろ。明日、朝一で告白しろよ。」

「あつ、明日ですか！？心の準備が…。」

「そんなこと言つてると、歩美ちゃんがしびれ切らして、自分から  
告白してくるぞ？」

「それは困ります！！告白は、僕からしたいです。コナン君もそう  
だつたんでしょう？」

「ん？俺か？ああ、俺からだよ、勿論。」  
コナンはその時のことを思い出し、遠い目をした。

~~~~~回想~~~~~

小学2年の冬、組織壊滅の少し前のこと。

その日、FBIからの連絡で、近い内に組織へ乗り込むことが決まった。

コナンの隣でそれを聞いた哀は、何かを決意したような顔で、一つのカプセルを差し出した。

「工藤君、これで、24時間だけ元に戻るわ。だから、組織との対決の前に、蘭さんに説明してあげて！そして、あなたの気持ちも彼女に伝えてあげてほしいの。勿論、事情を説明するために、私も一緒に元に戻るわ。」

「灰原…。分かった。幼児化のことと、組織の詳細については言わないで、出来るだけ真実を話そう。」

「出来るだけ早い方がいいわね。明日はどうか？日曜日だし。」

「ちよつと聞いてみるな。」

コナンは、新一の携帯と蝶ネクタイ型変声機を持ち、蘭に電話をかけた。

「あ、もしもし？蘭か？オレ。新一だよ。」

“新一！？本当に新一なの？今どこにいるのよお。”

「ああ、心配かけてすまねえな。明日、朝10時に阿笠博士の家に来れるか？話があるんだ。」

“心配なんかしてないわよ！明日の10時ね。大丈夫よ。”

「じゃあ、わりいけど、頼むな。明日、待ってるから。」  
“分かった。じゃあね。”

「平気だつてさ。何時に解毒剤飲めばいいんだ？」

「そうね、朝7時かしら。データもとりたいし。」

「じゃあ、今日は泊まるな。」

翌朝10時、約束通りに蘭は阿笠邸の門をくぐった。

出迎えた博士に挨拶をし、リビングに行くと、そこには、新一と見知らぬ美女が立っていた。

「新一！来たよ。おはよう。そちらの人は？」

「ああ、蘭、おはよう。呼び出して悪かったな。彼女は、宮野志保。今、関わってる事件の依頼人だ。」

「ふうん、毛利蘭です。よろしく！」

「…、宮野志保です。」

ペコリと頭を下げる志保。その髪はストレートだった。哀との関係を探られないようにとった対応策である。

「まあ、座ろうぜ。今、コーヒー淹れるからよ。」

「工藤君、私が淹れてくるわ。その間に説明を。」

と言い、席を立ちキッチンへと向かった。

志保がコーヒーを淹れている間に、大まかな概要は説明した。

そして、まだ解決しておらず、詳しいことは話せないことも言っておいた。

そして、志保が3人分のコーヒを入れて戻ってきたところで、  
「ねえ、新一、その事件、解決の目処が立ったから、話してくれて  
るんだよね？」

「ああ、まあな。」

「じゃあ、それが終わったら、帰ってこれるんだよね！？もう、ど  
こにも行かないんでしょ？」

「あ…、いや、もしかしたら、無事には戻って来れないかもしれね  
えんだ。」

「どういうこと？そんなに危険なの！？」

「ああ、敵は、血も涙もない犯罪組織だからな。それに…」  
言葉を濁す新一を不審に思い、蘭は先を促した。

「それに、何？」

「蘭、俺、オメエにさ、ずっと、待っていてくれて言い続けてきた  
よな？」

「うん。だから、私、ずっと待ってたんだよ。」

「ああ、分かってる。そんなこと言って待たせてたのに、俺は、も  
し、無事に帰ってきてても、オメエのそこには戻らねえ。」

「工藤君！？あなた、自分が何を言ってるかわかってるの？」

「新一…、どういうこと？」

新一は、神妙な顔をして、

「俺、宮野と行動をとにもするようになって、気付いたことがある  
んだ。」

蘭は目だけで先を促す。

「蘭に感じていた思いは、義務感から来る、庇護欲であって、愛や  
恋では無かったんだ。蘭のことは、守らなきゃいけない、大切な奴  
だと思ってた。だけど、宮野は、俺が、自分の手で守りたい、幸せ  
にしてやりたい奴なんだ。」

「貴方、何を言ってるの？それは、姉のことがあったからでしょ！  
！それこそ贖罪の気持ちじゃない。」

「いや、違うんだ。確かに、お姉さんを助けられなかったのは、今でも後悔しているさ。でも、それとこれとは違う。オメエの涙を見て、俺は決めたんだ。コイツを一生守っていくと。俺の人生をかけてでも、オメエを幸せにするってな。」

「新一…、そつか。何か、納得しちゃったな。私は大丈夫。実は、昨日ね、新出先生に告白されたの。新一を待ち続けるのも疲れちゃってね、受けようと思ってたところなの。」

「え？蘭さん？本当にそれでいいの？」

困惑した様子の志保に、いつもの笑顔を向け、

「ええ。だから、宮野さん、新一に、ちゃんと答えてあげて。」

「蘭さん、ごめんなさい。そして、ありがとう。」

志保は、涙を流しながら、蘭に頭を下げた。

そして、涙を拭い、新一へと向き直る

「工藤君、私も、初めて会ったときから、貴方が好きだったの。」

「宮野！いや、志保、俺の手でオメエを幸せにしたい。愛してる。ずっと、俺の傍にいてくれるか？」

「ええ！工藤君、私も愛してる、ずっと、傍にいるわ。」

蘭は、二人を見守り、そっと阿笠邸を後にした。

~~~~~回想終了~~~~~

「コナン君？いきなり黙り込んで、どうしたんですか？」

「あっ、いや、ちょっと思い出してな。」

「ちなみに、コナン君は、灰原さんに何て言っただけで告白したんですか？」

？」

光彦が、興味津々な様子で聞いてくるが、

「へっ、誰が教えるかよ！それは、哀だけが知ってればいいことだぜ？」

「ケチですねぇ。」

「で？告白する決心はついたか？」

「はい！頑張ります！僕も、コナン君や元太君に負けてはいられませんからね。」

二人で不敵に笑い合い、しっかりとした足取りで公園を後にした。



## 迷いと決意（後書き）

ちょっと長くなってしまいました。

回想シーンは、前話の回想の前の日の話です。

次は、光彦、いよいよ告白か！？

告白 盗み聞き(前書き)

いよいよ、光彦君の告白です！  
その時、3人は…。

## 告白 盗み聞き

公園からの帰り道、コナンは、光彦に切り出した。

「明日の朝は、お前ら2人で行けよ。そんな時に告白しろ。元太と哀には言っとくからさ。」

「登校中にですか?」

「ああ、改めて呼び出すのは勇気がいるぞ?」

「そうですね。呼び出す時点で相当緊張しますよね。」

「だから、無理矢理にでも二人きりの状況を作った方がいいだろ?」

「……はい。」

「じゃあ、明日は頑張れよ!」

「コナン君!ありがとうございます。また、明日。」

「おう、じゃあな。」

翌日、待ち合わせの少し前。

光彦はいつもの交差点に、歩美と二人きりでいた。

他の3人はというと、近くのビルの陰で身を潜めて二人を見守っていた。

「なあコナン、あいつ、本当に言えんのか?」

「大丈夫だろ?昨日、ちよっと脅しかけといたしな。」

「あら、脅し?でも、それくらいしなきゃ、動かないわよね。まったく、奥手なんだから。歩美ちゃんが可哀想だわ。」

「でもよお、こんなに離れてるんじゃ、会話聞こえねえじゃんか。」

「元太、俺を誰だと思ってんだ?ぬかりはねえよ。昨日の帰り際、光彦の襟の裏に着けといたんだ。」

不敵な笑みで、盗聴器の受信ボタンを押した。

「ふふ。悪い人ね。」

「やるなあ、コナン!流石だぜ!」

「おっ！何か喋ってるぞ。」

「おはよー。光彦君！あれ？みんなは??」

「おはようございます。歩美ちゃん。あ…、皆さん、今日は別で行くそうです。」

「え？どうして?」

「あの、そのお、実はですね、僕、歩美ちゃんに話したいことがあります。」

歩美は、内心ドキドキと期待に胸を膨らませつつ、

「な・何?」

「あの、歩きながらも良いですか？遅刻するとマズいですし。」  
少し、緊張した面もちながらも、まずは、場を和ませようとする。

「そうだね。遅刻はダメだよね!」

「はい。行きましょう。」

歩美を促しながら歩き出した。

その後ろを、一定の距離を保ちながら、ついていく3人。

「なかなか、切り出さないわね。」

「光彦のことだ、何て言おうか迷ってるんじゃないか?」

「なあコナン、学校まで、そんなに距離無いぞ？本当に大丈夫か?」

と、話していたその時、

「歩美ちゃん!あの、僕、歩美ちゃんのことを、好きなんです!」

「言えました。とうとう想いを伝えました。何のひねりもなかったですけど、顔もスゴく熱いんですけど、僕は、頑張りました!」

と、光彦が心の中で叫んでいると、

「…ほん…とう?光彦君、私のこと、好き…?」

歩美は、戸惑ったような、信じられ無いような気持ちで聞き返した。

「はい!本当です。ずっと歩美ちゃんを好きなんです。僕と、付き合ってもらえますか?」

歩美は、嬉しさのあまり、涙を零しながら、

「わ…たし…、私も光彦君が好き。ずっと好きなの。」

「歩美ちゃん！」

光彦は、そんな歩美を、抱きしめた。通学路だということは、最早、頭にはなかった。

あと5分で予鈴がなるという頃、見かねたコナン達が、声をかけた。

「おい、いつまでそうしてる気だ？」

「あと、5分でチャイム鳴るぞ！！」

「これで、学校中に広まるわね。」

抱き合つたまま二人の世界に入っていたため、突然のことに、二人は驚愕した。

「ええっ！！？3人も、先に行ったんじゃないの？」

「うわっ、あの、その、あ…っ！学校！！早く行きませんか！！」

恥ずかしいやら、嬉しいやらで、ごまかしきれないことに気付かない二人。その場をやり過ごそうとするが、

「まあ、詳しいことは、後で聞いわね。歩美ちゃん。」

「光彦！報告しろよ？」

「結果は分かってるけどな。」

口々に言い、3人は走っていった。

残された2人は、顔を見合わせ、微笑み合ってから、急いで後を追うべく走り出した。

「待つてよ〜！哀ちゃ〜ん。」

「待つてくださいよ！！コナン君、元太君！」

こうして、5人の高校生活は始まったのである。

**告白 盗み聞き(後書き)**

無事に告白成功!!  
次は部活かな。

## 広まる噂（前書き）

前話の直後、教室でのお話です。  
探偵団の交際宣言！！



## 広まる噂

5人が急いで教室に駆け込むと…。

帝丹中学出身者が、それぞれ多数の生徒たちに囲まれるという状況にあった。

理由はもちろん、歩美と光彦の関係についてだ。

しかし、その2人を含む『帝丹中学少年探偵団』は、あまりにも有名すぎた。

男子生徒たちは、

「あの、探偵団の天使、吉田歩美に彼氏が!？」

「ウソだ、嘘だと言ってくれ〜!!」

「俺たちの歩美ちゃんが…。」

「でも、相手は円谷か…、勝てっこない…。」

などなど、歩美ファンの男子達の嘆きと嫉妬と諦めの声が、学校中、いや、近隣の学校にも響いていた。

そして、光彦ファンの年上女子からは、

「円谷君に彼女が出来たって〜。」

「え〜? 狙ってたのにい。」

「でも、あの、吉田さんでしょ!?! 勝ち目くない?」

「とりあえず、フられるの覚悟であたってみようかしら…。」

など、未だ諦め切れぬざわめきが聞こえてきた。

ついでと言わんばかりに、コナンと哀の噂、元太の彼女情報も、一緒になって訊かれている。

「おいおい、流石にこれはないんじゃないかねえか？」

「そうね、でも、いいんじゃない？たまには事件以外のことで騒がれるのも。」

「そうだな！全部事実だしな！！」

「ちよつ！！元太君、そんな大きな声で！！！」

「そうだよ！元太君、そんなこと大声で言ったら…。」

「ねえねえ、さっきの話本当！？」

「円谷君と吉田さんって、付き合ってるの？」

「江戸川君と灰原さんも！？」

「小嶋君には一個下の彼女がいるって本当？？」

と、いつの間にか、5人はクラスメート達に囲まれ、矢継ぎ早に質問されていた。

「あゝ！！もう、ちよつと待て。順番に答えるから。な？」

コナンは、若干キレ気味でその場の全員に向けて言い放つ。

「まずは、歩美ちゃんと円谷君ね。」

冷静に話を進める哀に、歩美は頬を朱に染めながら、

「き…今日から、私と光彦君は付き合い始めたの。」

周りの男子へ鋭い視線を向け、

「歩美ちゃんは僕の彼女ですから！！！」

と言い、一呼吸置いて、先程より大きめな凜とした口調で、

「僕には歩美ちゃん以外考えられません！」

と言い切った。

少しざわめく生徒たちを余所に、

「言うじゃねえか、光彦！次は、コナンと灰原だな。」

と元太が次を促すと、

「ああ。俺と哀は小2の冬から付き合ってる。」

「かれこれ、7年以上になるわね。」

言いながら、2人は肩を寄せ合い、コナンは哀の腰に手を回した。

「俺には、哀しか女に見えないし、哀さえいれればいい。他はいらないから。」

コナンは皆の前で、哀に甘い言葉を囁く。哀は照れながらも、

「コナン、私もよ。貴方が隣に居てくれるなら、他に何もいらなわ。」

と言り返す。

甘過ぎる言葉にあてられる者多数。

故に、コナン・哀ファンは、一瞬で諦めざるを得なかった。

あまりに美男美女過ぎて、間に割ってはいるのも、些か難しいものがあるのも、理由の一つだ。

そして、最後に、

「俺も、帝丹中の3年に彼女がいるぞ。来年、ここに入ってくる予定だ。俺も、あいつ以外眼中にないからな。」

と、元太は淡々と語った。

5人が話し終わると、友達と話し合う者、ケータイでメールを打ち始める者、どこかに電話しだす者、席につき静かに泣く者などがいた。

しかし、哀とコナン以外、誰一人として気付いていないことがあった。それは、チャイムが鳴り、担任教師が教室に入ってきていたことだった。

教師としては、注意をしようかとも思ったのだが、何とも、話しかけづらい状況だったため、つい、見守ってしまったのだ。

それがいけなかった。

ホームルームを始めるタイミングを逸してしまい、途方に暮れる羽目になったのだから。

そんな教師を見て、哀とコナンは、部活申請のための作戦を練りだしたのだった。

## 広まる噂（後書き）

これで、全校に、いや、近隣の学校中に広まったはず。  
部活申請の話は、次話に持ち越しです。

## 勧誘（前書き）

今回は、部活の勧誘がメインです。

この騒動を乗り越えれば、探偵部が立ち上げられるが…。

## 勧誘

新入生が、学校に慣れてきたある日のこと。  
2・3年生による部活への勧誘が始まった。

特に、1-Aの教室では、運動部・文化部共に激しい勧誘が行われていた。

理由は、少年探偵団の4人である。（元太は柔道部への入部が決まっているので特になし）

コナンと光彦には、サッカー部、ミステリー研究部から。

哀には科学部、ミステリー研究部、料理部から。

歩美には、テニス部、新体操部、ミステリー研究部から。

それぞれ、休み時間の度に囲まれて、勧誘されていた。

今までの、探偵団の実績を知り、ミステリー研究部はかなり本気で4人の勧誘に乗り出していた。

しかし、サッカー部も負けじと、男子2人を勧誘しようと躍起になっている。中学時代、2人はサッカー部に在籍していて、共にチームを引っ張り、大会ではそれなりの活躍を見せていたのだ。

歩美への、テニス部と新体操部からの勧誘は、どちらにも仲のいい先輩が居たのが理由だ。中学の体育祭や球技大会で、歩美の運動神経が良いのは実証されていた。

哀への科学部からの勧誘は、ある科学雑誌に載った、哀の研究論文によるものだ。

料理部は、噂で哀が毎食、自分で料理をしていると訊いたからとか。

こんな勧誘の嵐の中、3人は冷静に対応していた。

「先輩方、申し訳ないのですが、私（僕）は、新たに部活を立ち上げる予定ですので、他の部への入部は出来ません。諦めて、教室へ戻って下さい。」

と、毎回毎回繰り返すのだった。

昼休みの屋上で、5人はお昼を食べていた。

コナンは哀に、光彦は歩美に作ってもらい、元太は彼女から登校途中で受け取っている。

それぞれのお弁当を広げながら雑談していた。

しかし、突然真面目な雰囲気になり、コナンは切り出した。

「なあ、そろそろ、本気で先輩方からの勧誘をどうにかしねえと、探偵部立ち上げらんねえぞ？」

「そうね、相手するのも大変だし。何か良い案ないかしら？」

「まずは、みんな共通のミス研部からですね。歩美ちゃん、活動内容はわかりますか？」

「うん。図書室でミステリー小説を読んでも、視聴覚室でミステリー映画観てるかだつて。」

歩美は、元来の人懐こい性格で、探偵団の情報収集を担当している。

「そうか、じゃあ、簡単だな。」

「どうすんだ？」

元太は、特に迷惑はかかってないが、探偵団の一員として、協力は



惜しまない考えだ。

「ああ、ウチの蔵書の話しをすりゃいいんだ。学校の図書室程度の蔵書なら、既に読む物はないってな。」

「工藤邸の蔵書は半端じゃないものね。」

そう、コナンは、中学に上がったとき、工藤夫妻と養子縁組みをしたのだ。苗字が違うのは、皆がそれに慣れていたので、【江戸川コナン】でいると決意したからだ。

「そっか、中学の時に、みんなで読み漁ってたもんね!!」

「では、ミス研部はそれで良いとしまして、コナン君、サッカー部はどうしましょう?」

「あゝ、ウチのサッカー部ってどの位のレベルだったか?」

「地区で上位だけど、全国区じゃなかったはずよ。」

「うん、バランスはいいんだけど、決定力に欠けてるみたい。」

「2人とも、サンキュー。なら、俺たちと勝負をして、こっちが勝つたら、今後一切、関わらないって約束させるか。」

「いいですね!まず負けることはないでしょう。あ、元太君、キーパーやって貰えますか?」

「おっ!俺の出番か!?!いいぜ。任せとけ!!」

コナンは、中学のサッカー部では、実力の半分も出さずにプレーしていた。

光彦は、小学生の頃からコナンとサッカーをしていたので、自ずとレベルは高くなっていったのだ。

元太は、柔道で鍛えた瞬発力とパワーがある上、光彦同様、サッカーセンスもいつの間にか身に付いていた。

この3人なら、例え上級生相手でも負けることはないだろう。

「私の科学部と料理部は、問題ないわ。どちらもレベルが違うから。部に入る意味ないし。あの程度なら、言い負かすのは容易いわ。」  
「私の方も、大丈夫だと思う。先輩たちも、ノリで誘ってるだけだし。周りが落ち着いたら、平気のはず！」  
「そっか。じゃあ、まずは、放課後、ミス研部撃退だな！」

そこで、昼休みの終了を知らせるチャイムが鳴り、5人は教室へと戻っていった。

## 勧誘（後書き）

最近の高校には、どんな部活があるんでしょうねえ？

次回は、撃退編です！！

**撃退く文化部編く（前書き）**

文化部編です。

誤字が有ったので修正しました。

2011/11/04 編集

## 撃退く文化部編く

放課後、元太を除く4人は、ミステリー研究部の部室の前にいた。

歩美が調べたところ、ミス研は、放課後、一旦部室に集まって、ミーティングをしてから、図書室か視聴覚かに揃って移動するらしい。したがって、ホームルームが終わって直ぐのこの時間は、部室にいるはずである。

「まずは、ココからだな。」

「上手くいくかな？」

「大丈夫よ。歩美ちゃん。彼がちゃんと言い負かすわ。」

「では皆さん、良いですか？行きますよ？」

コンコン

光彦がドアをノックした。すると、中から、

「はい、どうぞ。」

と言って、部員の山本（2年）がドアを開けながら、

「ようこそ。ミステリー研…きゅう…、あっっ!!！」

言い終わらぬ内に、驚きの叫びになった声に、

「いきなり大声を出すんじゃない！皆に迷惑だろう!!！」

と部長の北村から、怒声が飛んだが、山本はそれどころではなかった。

「あ…、ああ、た・たた探偵団!!!!！」

「えっ!? なっ何っ! まさか!!!? ちよつとどけっ!」

どもる山本を押し退け、北村部長が扉の前に来た。

「こんにちは。部長さん。」

歩美が笑顔で挨拶をする。

「やあ、君たち、やっと入部する気になってくれたんだね!!」  
満面の笑顔で北村部長は4人を歓迎した。

しかし、次の瞬間、光彦の言葉で部長以下8人の部員達は、凍りついた。

「いえ、正式にお断りするのに、一応、そちらの活動内容を知っておこうと思ひまして。」

すかさず哀は、

「今日は、何をするんですか？」

と質問を浴びせた。

いち早く、正気に戻った部員が、

「あ、えーっと、今日は、図書室で小説を読む予定だけど。」

と答えると、

「本は、図書室のを読んでるんですか？そんなに、置いてなかったと思ひましたけど。」

とコナンが再び質問をする。

「ああ、図書室のだけだよ。持ち込みは禁止にしているんだ。盗難と

かがあると困るからね。」

「そうですか、じゃあ、やっぱり、僕達が入部することはないですね。」

コナンはサラリと言い切った。

やっと先ほどの衝撃的な発言から立ち直った北村部長は、その言葉に、

「なぜ!?君だって、ホームズが好きだろう!!図書室には全巻揃ってるよ!」

どうにか興味を引こうと、ホームズの話を出してみるが、

「ウチの書齋にも全巻揃ってます。僕の養父はあの、工藤優作ですよ?世界中のあらゆるミステリーを収集してます。僕がまだ読んでいないのは、原文で書かれてるものだけです。まあ、それも、もう、

そんなにはないですけどね。そんな、僕に図書室にある、何を読めと仰るんですか？皆も、中学の頃にウチで、日本語に訳されてるのは読んでますから、今更読むものありませんよ。」と、淡々と説明した。

すかさず光彦は、

「何か、他に断る理由は必要ですか？」

歩美も、

「それに、私たち、今までの経験を生かして、新しく部活立ち上げますから。」

最後に哀が、

「これ以上、私達を勧誘するのは、止めていただけますね？」と、極上の笑顔で有無を言わず、頷かせた。

固まった部員達を部室に残し、颯爽と去っていく四人だった。

「上手くいったね！」

「事実しかいってないんですけどね。」

「最後の哀の笑顔でKOだったな。」

「これで、ちよつとは静かになるわね。」

教室に戻り、帰り支度をしながら、話していると、

「あ、私、ちよつと料理部と科学部に行ってくるわ。先に帰ってても良いわよ。」

と哀は言っつて、鞆を置いたまま教室から出て行った。

「あゝ、俺、哀を待ってるから、オメーら先帰って良いぞ。」

「いえ、コナン君、サッカー部のことでちよつとお話しが…。」

「ん？何だ？今日は無理だぞ。元太いねーし。っつーか、やるなら、

昼休みだな。」

「そうですね。僕も、昼休みがいいと思ってました。そうじゃなくて、人数ですよ。」

「人数？」

「はい。キーパー入れて3人はやっぱりツライと思うんですよ。せめてもう一人……。」

「ああ、確かにね。でも、サッカー部の奴らには頼めねーし。あいづら、わざと負けそうだしな。」

「そ、そうですね。どうしましょう?」

2人が悩んでいると、歩美がおずおずと口を挟んだ。

「あ……あのさ、2人とも、……私で良かったら、一緒に戦つよ?」

「……えっ!?!」

2人は、思いがけない言葉に、目を見開いて驚いた。

「だってね、私だって、みんなとサッカーで遊んできたよ。運動神経は自信あるし、15分位で良いなら、フルで動けると思うの。」

「歩美ちゃん、いいのか?相手は男子だよ?」

コナンは、気遣うように聞くが、

「大丈夫!!今までだって、男子と試合してたもん。」

笑顔で言い返す歩美。

「でも、サッカー部だって本気で来るはずですよ!!ケガでもしたらどうするんですか!?!」

心配しすぎて、少し声を荒げてしまった光彦。

「光彦君、大丈夫だよ。それにね、私だって、探偵団の一員だよ!協力させてよ。ね?」

諭すように光彦に言っつて、最後は、得意のおねだり攻撃。

そう、歩美は、両手を顔の前であわせて、小首を傾げて見上げるようにお願いのポーズをしたのだった。

2人とも、頷いてしまった。

結局は、歩美に弱いのである。



光彦は、惚れた弱み。

コナンは、かわいい妹のおねだりとして。

そして、そのまま、コナン達3人は、サッカー部のいるグラウンドへ行き、サッカー部に、明日の昼休みに、試合をすること、内容として、

? 人数は、キーパー込みで4人（交代は自由）

? 試合時間は15分

? 試合時間内に、先に3点取れば、その場で試合終了

? 探偵団が勝てば、今後一切の勧誘行為は禁止

? サッカー部が勝てば、コナンと光彦は入部する

との条件で、試合の約束を取り付け、教室へと戻っていった。

3人がサッカー部の話しをしている頃、哀はというと、料理部のいる、調理実習室に来ていた。

「こんにちは。部長さん。再三の勧誘のお返事にきました。」  
と、哀が無表情でいうと、部長と呼ばれた3年の梶井は、満面の笑顔で歓迎した。

「いらつしゃい、灰原さん。良いお返事を持って来てくれたのね！」

「喜んでいるところ申し訳ないんですけど、私、入部しませんよ。習うべきこともありませんし、部活は、皆と新しく立ち上げますの

で、これ以上の勧誘は止めていただけますか？はつきり申し上げて、迷惑極まりないです。」

と、一息で言い切り、呆然と立ち尽くす部員達をそのままに、調理実習室を後にした。

そして、科学部のいる科学実験室へと向かい、ドアをノックした。  
コンコン

「失礼します。」

「どうぞ。ようこそ……って、灰原さん！！まさか、入部！？」

入ってきた哀を見て、3年で部長の山縣は、喋りながら近づいてきた。

「いえ、これ以上の勧誘はご遠慮願おうと思ひまして、正式に断りにきました。」

「何故！？何がダメなんですか？」

「強いて言わせていただくなら、レベルですね。私の研究論文を読んだんですよ？100%理解できましたか？無理ですよ？高校や大学では習わないようなことも書きましたし。」

「たっ、確かに、僕達には理解できなかったけど、有名大学の教授達が、拳つて誉めてたじゃないか！！そんな人が、何で科学部に入らないなんて言える？」

「理由は先ほど申し上げたでしょう？科学部で、私の研究を進めることは出来ないし、そもそも、理解していない人間と共同で実験しようとは思いませんから。実験のチームは、同レベルの人間が多数いることで、前に進めるのであって、1人が抜き出していたら、そのチームは、教える人と教わる人に分かれるでしょう？私には、教える気はないので、この関係は成り立ちません。今言ったことは理解できましたよね？」

哀の勢いに、啞然とする山縣と部員達。とりあえず、

「あ、ああ……。」

と頷いた。

「では、二度と勧誘などをしに、私の前には現れないでいただけますね？」

無表情で念を押す哀に、

「はい、すみませんでした。」

と、元気なく応えた。

すると、哀は笑顔で、

「では、失礼しました。」

と言って、実験室をでて、教室へと向かった。

この後、哀への勧誘は一切なくなったのは言うまでもないだろう。

30分程で戻ってきた哀と、コナン達は合流し、帰路についた。

帰り途中、3人は哀に、サッカー部とは、明日の昼休みに試合をすることや、歩美も試合にできることを話した。

撃退（文化部編）（後書き）

ご指摘いただきました、青ハル様、ありがとうございました。

以後、気を付けます。

撃退く作戦会議編く（前書き）

ごめんなさい。だいぶ更新が遅れた上に、サッカーの試合まで行き  
着きませんでした。

## 撃退く作戦会議編く

翌朝、いつもの交差点で、いつものように挨拶を交わした5人は、今日の昼休みのサッカー部との試合について話し合い始めた。

元太には、昨晚、コナンがメールをして、基本ルールの説明はしてある。

「とりあえず、位置の確認からしておきましょう。」

光彦は、鞆からノートとシャーペンを取り出しながら切り出した。

「ゴールキーパーには、元太。」

「おお！任せとけ！！！」

「センターが俺で、右サイドに歩美ちゃん。」

「私が右サイドね！」

「ああ、で、光彦が左サイド。」

「いつも通りですね。」

「哀は、監督な。相手の分析を頼む。」

「ええ。分かったわ。」

「歩美ちゃん、相手のスタメンは予想できるか？」

コナンの問いかけに、ちょっと考えてから、

「3年でキャプテンの荒木先輩は確実だと思う。ゴールキーパーも、3年の梶井先輩のはず。あとは、3年の日比野先輩と、2年で、元帝丹中サッカー部キャプテンの牛島先輩かな。」

「げっ！牛島先輩！？」

「ヤバいですね。先輩は、僕たちのプレーを知ってますからねえ。」

「でもよお、俺と歩美のことは知らねえだろ？」

「まあ、それはそうか。サッカー部では、俺、本気出してねえしな。」

「そうよ。それに、向こうのデータなら、過去の試合をネットで検

索して、大体揃えたわよ。」

「ああ、昨日遅くまで調べてたのはそれだったのか。」

「あら。気付いてたの？」

「バー口オ、俺が気付かないわけないだろ。いつでもオメエのことを見てるんだからよ。」

少し照れながら見つめ合うコナンと哀に、

「ちよつと2人ともしいい加減話戻してよね。」

と、呆れたように歩美が言った。

はっとして哀は、

「あら、ごめんなさい。大体のプレー傾向ね。荒木キャプテンは、技術的には中の下って感じかしら。パスは右サイドに回すことが多いわね。キャプテンだけあって、視野が広いから、敵味方両方の動きをよく見てるわ。今回は確実にセンターで来るはずよ。1対1は苦手。コナンなら楽にボールを奪えるわ。」

「中の下ねえ。パスさえ回させなきゃ取れるってことが。ディフェンスについては何かあるか？」

コナンは情報を整理しながら、哀に聞く。

「そうね…。ボールを奪つてるとこは見たこと無いわね。ああ、持久力は有るわ。ボールは奪われなくても、マークは外せないかもしれない。」

コレには、光彦が、

「うーん、少し厄介ですね。でも、コナン君のボールコントロールは秀逸ですからね。大丈夫でしょう。」

そこで元太が口を開いた。

「なあ灰原、シュートは何か、決まったコースとかかないの？」

「シュートは、殆ど外れるから。狙いとしては、いつも向かって右上。」

「そっか。まあ、とりあえず、いつでも右に跳べるようにしとくか。」

「

「でも、あくまで参考だから。頭に入れておくだけにしなさい。」  
「わかった。」

と、そこで5人は高校に到着し、いったん教室に荷物を置いて、屋上へと向かった。

歩美が話の続きを促すために、

「次は、ゴールキーパーの梶井先輩ね。」

と言い、哀が、

「梶井先輩は、動態視力には優れているけど、瞬発力がそれに追いついてないわね。だから、近いところからのシュートに弱いわ。あと、足下を狙ったシュートも止め辛いみたい。」

「じゃあ、なるべく近くから、足下を狙えば私でもシュート出来るかなあ？」

と聞いてくる歩美に、微笑みながら、

「そうね。いけるかもしれないわ。チャンスがあったら、思いっきり蹴ってみなさい。」

と哀は優しく言った。

「3年の日比野先輩は、たぶん歩美ちゃんの相手になるわ。」

「そうでしょうね。間違いなく、牛島先輩を僕に当ててくるはずですから。」

と光彦が少ししかめ面で言うと、

「まあ、その方が、光彦もやりやすいだろ？先輩の癖は分かっているし。オメエだって、先輩達がいる時は遠慮して本気出してなかったじゃねえか。」

「あはは、気付いてたんですね。遠慮してたの。」

「ああ、いつもの動きと違ってたからな。」

「コナン君には適いませんね。」

と、コナンと光彦が話していると、

「説明続けていいかしら？」



哀はジト目で2人を見る。

「すつ、すみません。」

「ああ、悪かったな。」

と2人は慌てて謝った。

「日比野先輩は、瞬発力に優れているわ。気を付けてないとマークを外されるかもしれない。でも、コントロールは悪いから、歩美ちゃんのスピードがあれば、ボールは奪えるかも。シュートは、キーパーから遠いところを狙う傾向にあるわね。」

「俺は真ん中にいつでも動けるようにしとくな。」

「私は見失わないようにマークしないとだね。で、取ればボール取るよ！」

「歩美ちゃん、無理はしないで下さいね。」

「分かってるよお。光彦君ったら、心配性なんだから。」

歩美と光彦ははにかんで見つめ合っていた。

「イイ感じのそこワリイけどよお、そろそろ予鈴なるぞ。」

と元太が言ったので、5人は教室へと戻った。

次の休み時間は、教室で作戦会議を進めていた。

「牛島先輩は、知っての通り、持久力は無いわ。でも、今回は持久力関係ないのよね。とりあえず、注意するとすれば、技術力ね。特に得点力に関しては、他の2人とは比べものにならないわ。」

「ああ、でも、光彦なら止められるはずだ。」

「牛島先輩はテクニクは凄いですけど、ゴールまでのコースを考える時間がありますからね。そこを狙えばいける気がします。」

「考えてる時は足下疎かになるもんなあ。あの人。」

「ふふつ。そこは円谷君に任せるわ。」

「とりあえず、そんな感じかなあ？こっちの作戦は？」

5人は、急に真面目な顔になった。

「コナンを中心に左右へパスを回して、各自シュートのタイミング

を計って。ただそれだけで平気よ。コナン、あまり本気は出さないように。円谷君、あなたは本気出して。歩美ちゃんは瞬発力に自信を持って頑張つて。小嶋君、ゴールはあなたに任せるわよ。絶対に入れさせないで。」

「よし！徹底的に叩きのめすぞ。でも、歩美ちゃんは、無理するなよ。怪我をしちゃあ、元も子もないからな。」

「うん。無理はしないよ。でも、一点は入れるんだから！！」

「俺は、一点も入れさせねえから、安心して攻めるよな！」

「では、僕は先輩に実力の差を見せつけてあげましょう。」

「その意気ね。昼休みが楽しみだわ。情報の修正は任せて。弱点探すから。」

「よし。後は、昼休みを待つだけだな。」

そうして、昼休みまでの残りの授業に集中するのだった。

撃退く作戦会議編く(後書き)

次話こそ試合です！

撃退！サッカー部編（前書き）

やっと書けました。

サッカー好きな方、寛大な心で読んで下さい。

## 撃退！サッカー部編

昼休み。

5人は、早めに昼食をすませ、ジャージに着替えてグラウンドへと向かった。

アップのため、ゴールにいる元太に向かってシュートの練習や、パス回しの練習をする。

大団体が慣れてきた頃、サッカー部が現れた。

歩美の予想通りのメンバーが来ていた。

5分ほどサッカー部にアップの時間を与え、試合を始めることになった。

「先輩、正々堂々と勝負しましょう。僕たちは負けませんから！」  
コナンは、4人の先輩達に宣戦布告をした。

荒木キャプテンは、ニヤツと笑い、

「ああ、こつちも負けるわけにいかないからな。」  
と言って握手を交わした。

コイントスの結果、キックオフは探偵団からになった。

サッカー部は、荒木キャプテンを中心に右サイドに日比野先輩、左サイドに牛島先輩、そして、ゴールキーパーは梶井先輩だ。

『。』  
『。』

試合開始のホイッスルが鳴った。

まずは光彦がコナンへボールを送り、攻撃開始！

光彦は左サイドをゴール方面に駆け出した。

その空いたスペースにコナンはボールを蹴りながら向かい、逆サイドの歩美は一度センターラインギリギリまで下がる。そこへ、牛島をかわして光彦が右サイドに走る。

コナンは光彦へパスをし、すかさず空いた左サイドをゴールへと向かう。

歩美は日比野を置き去りに真ん中へ走り込み、光彦からパスを受け、そのまま蹴り進めてゴールキーパーの左足から少し離れたところに思い切りシュートを打ち込んだ。

思いの外速い球に反応が遅れた梶井は、歩美の蹴った球を止められず、開始早々で1失点をしてしまった。

それが、しかも、年下の女子にである。ショックを受けたの言うまでもない。

「きゃ〜！決まっちゃった 哀ちゃん見た！？先制点だよ〜！！」  
とハシヤぐ歩美。

哀は、笑顔で拍手し、

「歩美ちゃん、その調子よ。頑張って！！」

と声をかけた。

「俺たちも負けてらんねえな。」

「はい、頑張りましょう！次はディフェンスですよ。」

と、コナンと光彦の士気も上がる。

ショックから立ち直りきれしていない梶井は、とりあえず、荒木にパスを出した。

「よし！今の1点を取り返すぞ！！」

と声をかけながら、荒木はボールを蹴ってセンターラインまで来た。コナンは荒木をピタリとマークする。ここで、歩美が、日比野に振

り切られ、真ん中に向かって走り込む日比野にボールが渡った。何とか追いついた歩美だったが、やはり、コンパスの差が、すぐに振り切られてしまった。

そのまま、日比野は元太から遠い、右上角を狙ってシュートを撃つ。しかし、それを読んでいた元太にセーブされてしまった。

「くそっ！！」

悔しそうな声がした。

「みんな上がれ！！」

元太は叫びながら、左サイドに上がっていた光彦に思い切りパスをした。

難なく受け止めた光彦は、牛島と1対1でゴールを目指す。

コナン仕込みのボールコントロールで、巧みに牛島を翻弄する。

それをみたコナンは、邪魔をしないように右サイドに寄って場所を空けた。歩美もセンターライン付近で待機している。

流石に、加勢には行けないことを分かっているのか、荒木も、日比野も動けないでいた。

牛島は思った。

『あれ？円谷って、こんなに上手かったか？これじゃあまるで、中学時代の江戸川みたいじゃないか！円谷は、ちよつと上手いけど、周りに埋もれるタイプじゃなかったか？ここまで個人プレーで抜きん出てる奴じゃなかったはずだ。』

光彦は、それに気付いて、不敵に笑って、

「先輩、僕の実力は、あの頃とは違いますよ。今が、全力です。」  
と言って、用は済んだと言わんばかりに、牛島を抜き、ゴールへと向かった。

牛島は、『しまった！』と思い、必死で追いかけて、スライディングで足下のボール目掛けて滑り込むが、楽にかわされた上に、シュートを撃たれてしまった。

光彦の蹴った球は、左に寄って待ち構えていたキーパーの右上を通り抜け、ゴールネットを揺らしたのだった。

「よっし!! 2点目!」

とコナンは光彦とハイタッチをする。

歩美は光彦に抱きついて喜んだ。

「光彦君スゴい!」

「あ、歩美ちゃん、皆さんが見てますよ!」

「お〜い、ディフェンスに戻るぞ。」

冷静なコナンの声に、赤面しながら光彦が返事をする。

「はっ、はい! 歩美ちゃん、戻りますよ。」

「うん。」

そんな3人を微笑みながら見守っていた哀だが、急に険しい顔になり、牛島に鋭い視線を向けた。

『マズいわ。牛島先輩のあの目。不穏な気配がする。マークを変えさせようかしら。』

と考えていると、コナンと目があつた。

コナンも牛島の不穏な気配に気付いたらしい。

哀に向かって頷いてみせるコナンに、哀も頷く。

すると、コナンは光彦に向かって行き、

「光彦、荒木先輩についてくれ。何だか、悪い予感がするんだ。」  
と言った。

「え? はあ、いいですけど。」

と答え、荒木先輩へと向かって駆けていった。

荒木は、今度は牛島にパスを出した。

「なあ、江戸川。お前は中学の時、全然本気出してなかったよな?



円谷もなのか？」

と目が完全に据わり、睨みつけるように聞いてきた。

「はい。俺は、本気なんか出しませんよ。昔も…今もね。光彦は、先輩達を立てるのに、力を抜いてただけですよ。」  
と、仕方無さそうに説明した。

少し考え込む牛島の足は、ほぼ止まっていた。

その隙についてコナンはボールを奪いつつ、

「先輩、あなたがそんなだから、光彦が本気を出せなかったんですよ。」

と言って、そのまま、ゴールへと一直線に向かう。

それに気付いた光彦と歩美は、フォロワーのため直走る。

ディフェンス陣は完全に出遅れてしまった。

そして、キック力増強シューズが無くても、十分に強くなった脚力で、キーパーの真正面、足の間を狙ってシュートを撃ち込んだ。

あまりのスピード、そしてパワーに微動だに出来なかったキーパーの後ろでゴールネットが揺れた。

開始から、12分後の出来事だった。

当初のルール通り、時間内に3点先取したので、試合は終了になった。

「先輩方、約束です。今後一切、サッカー部への勧誘は止めてくださいね。」

とコナンは、荒木キャプテンに握手を求めながら言った。

「ああ、約束だ。それは守ろう。みんなにも言うておく。」

「ありがとうございます。」

「牛島先輩、今まで、本気を出さずにいてすみませんでした。」  
光彦は、牛島に向かって頭を下げた。

「いや、江戸川に言われて目が覚めたよ。俺達が弱すぎたんだな。  
気を使わせて悪かった。」

「いえ。では、先輩は、これからもサッカーを頑張ってください。僕  
たちは、探偵を頑張りますから。」  
先ほどの不穏な気配はすっかりと消え、晴れ晴れとした笑顔になっ  
ていた。

最後、お互いに、

「ありがとうございます。」  
と頭を下げて、試合は終了したのである。

その日以降、探偵団への部活の勧誘は無くなった。

撃退！サッカー部編（後書き）

なんか、サッカーのルールとか無視でごめんなさい。  
私にはコレが限界でした。

次は探偵部の活動内容が明らかに！？

探偵部（前書き）

探偵部、いよいよ発足！

誤字があったので、修正しました。

2011/11/04 編集

## 探偵部

部活勧誘も落ち着きを見せ始めたある日。

サッカー部との試合が、他の部にも噂になって聞こえ、探偵団への勧誘はすっかり影を潜めていた。

「なあ、そろそろ部活申請しないと始めらんないぞ?」

と、5人が屋上でお弁当を食べているときに、コナンは話し始めた。

「そうですね。まずは、申請内容を決めませんと。」

と光彦が応える。

「活動内容だよな。どうしようか?」

と歩美が訊いた。

「基本的には、『コナンに掛かってくる警察からの応援要請に応える』でいいんじゃないかしら。」

と哀が提案すると、

「ああ、そうだな。あとは、事件がない日だけど、その時は、『各自、探偵に必要な知識を身につけるための勉強をする』でどうだ?」

コナンは、前から考えていたことを言ってみた。

「うん! いいかも。私達、事件に遭遇しても、解決するのは大体、コナン君と哀ちゃんだもんね。私は情報収集位しかできてなかったし。良い機会かも。」

と、歩美は前向きに考えていた。

「僕も、良いと思います。コナン君や灰原さんに比べると、僕の知識は全然、足元にも及びませんからね。将来のことを考えても、勉強しておきたいです。」

光彦もコナンの意見に賛成だ。

「俺は、大体、柔道部の方に出てるから、何も出来ねえけど、良い

と思うぜ!!」

と、元太も頷いた。

「私も、まだまだ調べたいことがあるし、折角だから、医学だけじゃなくて法学とか、経営学も勉強したいわ。」

と哀も前向きだ。

「じゃあ、今日の放課後にでも、申請書作るか。」

「うん。歩美、後で申請用紙貰ってくるね。」

「僕も行きますよ。歩美ちゃん。」

「じゃあ、頼んだわね。2人とも。」

「あつ！俺の兼部の問題はどうすんだ？」

思い出したように元太は訊いてきた。

「ああ、それは、今日の放課後にでも、担任に聞いてみるさ。ちょうど柔道部の顧問だしな。」

「そうね。アレなら、言いくるめ…いえ、説得できそうよね。」

「じゃあ、ワリーけど頼むな。俺は今日も部活だから。」

「ああ、任せとけ。」

などと話していたら、昼休みの終了を告げるチャイムが鳴った。

そして、放課後。

ショートホームルームが終わり、担任教師が教室を後にしようとしたとき。

「先生！阪東先生!!! 少しお話があるんですが、お時間いただけますか？」

とコナンは哀と共に、担任の阪東先生に声を掛けた。

「ん？なんだ？江戸川に灰原。今すぐか？」

と不思議そうな顔で聞き返してきた。

「部活動の新規発足についてなんですけど、教室にいるので、後で来ていただいても大丈夫ですか？」

と哀が尋ねた。

「おう、じゃあ、荷物置いて、日誌に目を通してからでも良いか？30分しないで戻ってくるから。」

と阪東先生は聞き返した。

コナンと哀は、笑顔で、

「はい、では、お待ちしてます。」

と言って、軽く頭を下げて、机へと戻っていった。

コナンたちと入れ替わりで、歩美と光彦が、

「じゃあ、申請用紙取ってくるね。」

「行ってきます。」

と言って教室を出て行った。

「確か、申請用紙とかは、教員室に入って右側の棚にまとめて置いてあったよね？」

「はい。そのはずですよ。大丈夫です。すぐ見つかりますよ。」

など、会話をしながら、教員室へと向かっていた。

教員室に着くと、すぐに用紙を3枚ほど取って、教室へと戻って行った。

「あれ？歩美ちゃん、3枚も持って来たんですか？」

と光彦は歩きながら尋ねた。

「うん、だって、書き損じるかもしれないでしょ？予備だね。」

「ああ、そういうことでしたか。」

「大丈夫だと思うけど、一応ね。」

「ちよっと見せて貰えますか？」

「うん。はい、どうぞ。」

と、歩美は持つて来た内の1枚を光彦に差し出した。

「ありがとうございます。」

光彦は、それを受け取り、立ち止まって内容の確認をする。

「えーと、まず、部活名で、次に部員の学年・クラス・名前と、合計人数、それから活動内容で、最後に顧問になる先生の名前と承認印ですか。」

と光彦が呟くと、

「あっ！顧問…。」

と歩美がはっとして呟いた。

「とりあえず、コナン君と灰原さんに相談しましょう。」「そうだね！行こう。」

と、急ぎ足で教室へと戻っていった。

「おかえり。二人とも。」

「わざわざ悪かったな。」

と、コナンと哀は2人に言った。

「まだ先生戻って来てないんだよ。」

「先に申請用紙書いておきましょう。」

と言われた2人は、席に着きながら、申請用紙を渡した。

「ねえ、2人とも、ココ…。」

と、顧問記入欄を指差しながら、歩美が呟いた。

「ああ、そうだな。誰かにお願いしないといけねえんだよな。」  
とコナンが応えた。

「そうね、誰かいないかしら？どこの顧問もやってない先生いるかしら？歩美ちゃん、調べられる？」

と哀が歩美に訊くと、

「うん。去年の卒業アルバム見れば大体分かるはず。あとは、それ



を元に先生たちに聞き込みしてみるよ。」

「じゃあ、僕も一緒にします。コナン君たちは、先生と話していただきます。」

「ああ、わかった。頼むな。」

「こっちは任せて。」

歩美と光彦は、再び教室を後にし、図書室へと向かった。

そのすぐ後、担任の阪東が教室に戻ってきた。

「江戸川に灰原、待たせて悪かったな。」

と言いながらコナンたちの座っている席まで来た。

「いえ、こっちが無理をお願いしているんですから、気にしないでください。」

とコナンが笑顔で言うと、

「そうか？じゃあ、さっきの話だが…。」

と話を切り出した。

「はい。先生は、柔道部の顧問をしてらっしゃいますよね？」

「ああ。」

「では、少しお願いがあるんですが。」

「何だ？」

「僕たち、新しく『探偵部』を立ち上げようと思ってるんです。」

阪東が口を挟む前に、哀が言を継ぐ。

「それで、部員は私達と円谷君、吉田さんなんですけどね？部になるにはあと一人、足りないでしょうか？」

そのまま、阪東には口を挟みせずに、コナンと哀が、交互に話を進めていく。

「小嶋元太も、部員に入れたいんです。本人も最初から入る気満々です。」

「でも、彼は柔道推薦で来てるでしょ？」

「柔道部を疎かにしようとは思ってないんです。」

「ただ、探偵団の一員として、探偵部には参加したいというのが、本人の意向なんです。」

「メインでやるのは、勿論、柔道部です。ただ、俺達にとっても、元太…、いえ、小嶋は必要な存在なんです。」

「…どうか、探偵部にも部員登録させて貰えませんか?」「  
と、2人は深々と頭を下げた。

そんな2人に圧倒された板東は、無意識の内に頷いてしまった。

「あ…、ああ。分かった。」

それを訊いた2人は、満面の笑みを浮かべ、

「…ありがとうございます。」「」

と再び頭を下げた。

「じゃあ、遅くならないうちに帰るんだぞ。」

と言って教室を出て行った。

「はい。ありがとうございます。」

「さようなら。」

と、2人も立って応えて、先生を見送った。

「何とかなったな。」

「ええ。やっぱり簡単だったわね。」

「ああ。犯人追いつめるより遙かに楽だな。」

「ふふっ、比べるものじゃないわよ。」

と、哀は微笑みながら、コナンの肩に頭を持たせ掛けた。

「ははっ。そうだな。」

と応えながら、コナンは哀の腰に手を回して、引き寄せた。

そのまま、しばらくそうしていたが、廊下の方から足音が聞こえて

きた。

パツと2人が離れた瞬間、勢い良くドアが開いた。

「ただいま。」

「お待ちせしました。」

と言って、歩美と光彦が入ってきた。

「おう、どうだった？」

「何か収穫あった？」

とコナンと哀は口々に訊く。

すると、歩美がにっこり笑って

「うん！！見つけてきたよ。」

と言った。

「あら、やっぱり2人は優秀ね。こっちも、OK貰ったわよ。」

と哀が言っていると

「本当ですか！？さすがお二人ですね。」

「まあな。で、そっちは、結局誰がいたんだ？」

「あつ、うん。あのね、1 - Bの担任の、大友先生。新任で、まだ

何も担当してないんだって。」

「話をしてみたら、顧問になっていただけそうですよ！」

「おっ！でかした。2人とも。じゃあ、さっさと記入しちまおう。」

「

と言って、コナンは、新規部活動申請用紙にペンを走らせた。

?部活名 探偵部

?部員

部長：1 - A 江戸川コナン

副部長：1 - A 灰原哀

部員

1 - A 円谷光彦

1 - A 吉田歩美

1 - A 小嶋元太  
以上、5名

? 活動内容

- 1 . 警察からの応援要請に応え、事件解決に尽力する。
- 2 . 警察からの要請が無い時は、各自、探偵として必要な知識を身につけるため、勉強する。

例：法学、医学、薬学、経営学、語学など。

? 顧問

1 - B 担任 大友永嗣

ココまで書いて、コナンはペンを置いた。

「あとは、顧問の承認印だな。」

「ええ。まだいるかしら？」

「いるはずですよ。」

「大丈夫！待っててくれるって言ってたもん。」

と話ながら、四人は教員室へと向かった。

「失礼します。1 - Bの大友先生いらっしゃいますか？」とコナンがドアを開けて訪ねると、

「はい。」

と声が返ってきた。

「おっ！探偵部だな。待ってたぞ！」

と言いながら大股で近づいてきた。

「お待たせしてすみません。これが、申請用紙です。内容の確認をお願いします。」

と、コナンが紙を差し出す。

「ああ。……、ん？この小嶋って、柔道部の有力株か？兼部させて大丈夫なのか？」

「あ、それは、柔道部の顧問で私達の担任の阪東先生に了承を得ました。」

と、哀が説明する。

「そうか、ならいいが。ん？この、警察からの要請って、どういうことだ？警察が高校生に事件解決を頼むわけ無いだろう？」

「先生、この辺の人じゃないんですか？僕達、すでに小学生の時分から、警察と事件を解決してきてるんですよ。」

「帝丹小（帝丹中）少年探偵団って言えば、この辺りじゃ、結構有名なんですよ！」

と、光彦と歩美は自慢気に言った。

「あ……ああ、そうなのか？じゃあ、それもいいとしよう。あとは、問題ないな。よし、ちよつと待つてる。」

少し後退り気味で応え、用紙を持って机に向かった。そして、判を押してコナンに返しに来た。

「ありがとうございます。後は、生徒会に提出して、承認を貰えば、活動開始だな。」コナンは、先生にお礼を言い、振り返って皆に話しかけた。

「はい！じゃあ、早速生徒会に提出に行きましょう。」

「5時までにはいるらしいよ。」

「まだ間に合うわね。行きましょう。」

と話して、四人は教員室を後にした。

そして、生徒会室へ着き、ドアをノックする。

「失礼します。すみません、1-Aの江戸川と申しますが、会長はいらっしやいますか？」

すると、奥から1人の女生徒が近寄ってきた。

「はい？会長は私ですけど。何ですか？」

と、スラッとした長身で、髪を短く切りそろえている女生徒が名乗

り出た。

「あ、沢村会長ですね？今、お時間よろしいですか？新規部活動申請用紙を記入して来たんですが、目を通していただけますか？」

と言つて、コナンは申請用紙を差し出す。  
会長はニコリと笑つて、

「ええ、大丈夫ですよ。じゃあ、拝見しますね。」

と言つて、書類に目を通す。

4人は、ドキドキして会長の言葉を待っていた。

「はい、探偵部ですね。部員は5名、活動内容も特に問題ないわね。いいでしょう。承認します。木村君、ハンコ取つて。」

会長は、コナンたちに向かって笑顔で言うと、後ろを振り向いて、副会長の木村に話しかけた。

木村は、承認印を渡しながら、

「はい。どうぞ。」

と声を掛ける

「ありがとうございます。では、探偵部の活動を、本日付けで承認します。但し、くれぐれも怪我などしないように活動してください。」

木村に礼を言い、4人に向き直つて言った。

4人は、満面の笑みで、

「「「「はい。」」」」

と返事をし、

「ありがとうございます。失礼します。」

と頭を下げ退出した。

「やったね！コレで探偵団、活動再開だよ！！」

「いや、ちょっとドキドキしちゃいましたね。でも、良かったです！」

「本当、良かったわ。活動は明日からで良いわね？」

「ああ、俺も、警部たちに連絡しとかないと。応援要請来なくなっちまうな。」

そう、入学から今まで、一度も警察から連絡がないのは、コナンが警部たちに、落ち着くまで、応援要請は待ってもらおうように話していたからだ。

新一の時とは違い、授業中の呼び出しもやめてもらっている。

「とりあえず、今日はもう帰るか。」

「そうね。お夕飯の買い物もあるし。」

「そっか。じゃ、帰ろう。」

「一旦教室に戻って鞆取ってこないといけませんね。」

「ああ、じゃ、行こうぜ。」

と言って、四人は鞆を取りに行き、仲良く帰って行った。

探偵部（後書き）

ご指摘いただきました、青ハル様、ありがとうございました。

以後、気を引き締めて、頑張りますので宜しくお願いします。



## 報告（前書き）

お待たせしました。  
短いですが。

## 報告

探偵部が発足したその日、コナンは、自宅の電話から目暮警部に電話をかけた。

プルルル、プルルル、プルッ

『はい、目暮。』

「あ、もしもし？目暮警部ですか？」

『そつ、その声は！！工藤君かつ！？やっぱり生きて…！！』

「あの、すみません、江戸川コナンです…。」

『あつ、ああ、コナン君か。いや、勘違いしてすまなかつたね。』

「いえ。気にしないでください。ところで、僕と新一お兄さんの声つてそんなに似てますか？」

コナンは、本人なんだから、当たり前と言えば当たり前のことを訊いてみる。

『ああ、そうだね。よく似ているよ。声だけじゃなく、顔も、頭脳もな。』

目暮は電話の向こうでしみじみと言う。

「……………そうですか。」

『だがな、コナン君、君の方が工藤君より、視野が広い気がするよ。やっぱり、仲間がいると違うのかな？そう言えば、探偵団の子たちは元気かい？』

「あつ、今日はそのことで電話したんです！」

『ん？高校には慣れたかな？』

「はい。それで、今日なんですけど、探偵部を発足したので、授業中以外でしたら、捜査協力が出るようになったんです。」

『本当かい！？部活にしたのか。じゃあ、こちらからも学校側に話をした方がいいかな？』

「いえ、その辺は、活動内容に、警察からの協力要請に尽力すると

明記して、活動許可を取ったので、問題はないはずですよ。」

『おお、そうか。じゃあ、事件が起きたら、すぐに電話しよう。』

「はい、では、何かありましたら。これからも宜しくお願いします。」

「

コナンは電話口で頭を下げた。

『こちらこそ、よろしく頼むな。じゃあ、コナン君、また。』

「はい。失礼します。」

と言ってお互いに電話を切った。

コナンが電話を切ると、

「電話、終わった？警部さん、何か言ってた？」

と、エプロン姿の哀が近づいて来た。

その腰をさらう様に引き寄せて、

「ん？ああ、新一と間違われたよ。」

肩をすくめて、優しい笑顔で言うコナンに、

「そう…。」

少し俯いて小さな声で返す哀。

そんな哀を抱きしめて、

「哀、まだ気にしてんのか？コレで良かったんだよ。」

「…っでも！」

涙目になりながら言い返そうとした哀に、

「哀？俺は愛するお前と人生を歩んでいけてるんだ。これ以上幸せ

なことはない。な？」

真剣な瞳で見つめ、流れる哀の涙を唇ですくった。

「だから、もう泣かないでくれ。いつもの優しい笑顔を見せて？」

コナンの言葉に、哀は涙を拭いながら微笑んだ。

「ありがとう。私も愛してる。とっっても幸せよ。」

「ああ、誰よりも愛してるよ。よし！じゃあ、夕飯にするか？」

「ふふっ、そうね。今日はオムライスよ。」

2人は肩を寄せ合いながらリビングへ行き、夕飯を食べるのだった。



## 報告（後書き）

目暮警部の喋り方がいまいちつかめない…。  
次回は何か起きるかな？

## 教師と刑事

日暮警部に報告の電話をしてから、早数日。

警察からの応援要請もなく、平和な日々を過ごしていた。

「ねえ、みんな！もうすぐゴールデンウィークだよ！！」  
歩美がワクワクした顔で話し掛ける。

「そうですね。今年はどうしましょうか？元太君は柔道部で合宿があるって言っていましたけど。」

光彦は少し残念そうに応えた。

「あ、そう言えば、博士が、奥多摩の方に友人のコテージがあるって言っていたわよ。」

哀は思い出したように言った。

「ああ、そう言えば言っていたな。どうする？今年は4人で行くか？  
コナンは哀に頼きながら、みんなに訊いた。

「うーん：あつー！良いこと思いついちゃった」

歩美が何かを閃いた。

「なんですか？歩美ちゃん。」

「？？？？」

「あのね、私たちも、合宿にしちゃおうよー！」

「ええ？合宿ですか？」

「うん、もちろん、先生の許可を取ってからだけどね。」

「まあ、そりゃそうだな。」

「でも、合宿って、何するの？学校に居たんじゃ、事件は起きないわよ？」

「って、哀、なんかそれじゃ、『出掛けると事件が起きる』みたい  
な言い方だぞ？」

「あながち間違いではないんじゃないですか？コナン君。」

「そうだよ。皆でどこかに出掛けると、いつつも事件起きるし。」

「そうよね。誰かさんが事件吸引体質だから。ねえ？名探偵さん？」  
「俺かあ？」  
「はい。」  
「うん！！」  
「他に誰が居るかしら？」  
「ははは……、はあ。」  
「ふふつ。まあ、そんなことより、やるなら、先生に許可取らないと。」  
「そうだね！合宿内容きめちゃおう。」  
「まずは日時ですね。」  
光彦は机からノートを取り出し、何も書いていないページを開いた。  
「あゝ、じゃあ、5月2日〜4日とか？二泊三日ぐらいでいいんじゃないか？」  
「そうね。だれか、予定がある人居る？」  
「大丈夫だよ。」  
「僕も大丈夫です。」  
「じゃあ、日にちは決まりね。場所は……。」  
「博士の友人のコテージでいいんじゃないか？」  
「うん、そうだね。学校じゃ何も起きそうにないもんね。」  
「では、5月2日〜4日で、奥多摩のコテージ……っと。」  
光彦は確認しながらノートに書いていった。  
「内容はどうする？」  
「とりあえず、オーソドックスに親睦を深めるとか？」  
苦笑しながら光彦は、  
「それは、既にだいぶ深いかと……。」  
「そうね。まあ、事件が起きない限りは、各自勉強かしらね？解らないところは、お互いに訊けばいいし。」  
と哀がフォローした。  
「それが妥当だろうな。」  
コナンも、哀の意見に賛同した。

「じゃあ、それで行きましょう。えーと、事件が起きない限りは、各自勉強する…ですね。」

光彦はノートに書き込み、満足そうな顔をした。

「じゃあ、先生に許可取りに行こつ

」

と、4人は教員室へと向かった。

探偵部の4人が合宿の相談をしていた頃。

教員室には、3人の男女が訪ねてきていた。

「すみません、探偵部の顧問をしている先生はいらっしゃいますか？」

一番年の若い男性が話し掛ける。

「あつ！はい、私ですが。どう言ったご用件でしょうか？」

探偵部顧問の大友は、見知らぬ3人の男女を警戒しつつ、用件をきいた。

「あ、突然申し訳ございません。私、こういうものでございます。」  
と言つて、年配の男性は、懐から警察手帳を出し開いて見せた。

それに倣い、年若い2人の男女も、手帳を取り出し、開いて見せた。

「警視庁捜査一課の目暮と申します。」

「同じく、佐藤です。」

「高木です。」

と名乗った3人に、

「あつ、えー、探偵部顧問の大友と申します。」

とあわてて名乗り返した。

「今日は、どう言ったご用件で？探偵部の子たちが何かしでかした



んでしょうか？」

少し青ざめた様子で、訊いてくる大友に、

「ああ、いや、違うんです。あの子たちは、警察に迷惑を掛けるような人間じゃありませんから。」

高木は、苦笑しながら言い返した。

「では…？」

安心した大友だが、そうなるとう件が気になった。

「ええ、今日は、探偵部の子たちを度々借りることになるので、ご挨拶にと伺ったんですよ。」

佐藤は、笑顔で言った。

「いや、コナン君には、ちゃんと許可は取ってあるから大丈夫だと言われたんですが、それはそれ、一応、ご挨拶だけはと伺った次第で。」

と、目暮が苦笑しながら付け足した。

「えっ！？じゃあ、彼らが、度々事件を解決してるって言うのは本当のことなんですか？」

「おや、知らなかったんですか？彼らには、小学生の頃から、協力してもらってるんですよ。」

「えっ！？」

「新聞に載ったこともありましたよ。地元では、結構有名ですし。」

「最近では、あの工藤新一の再来かと言われるくらいです。特にコナン君が、工藤君とそっくりだね。」

「まさか…、本当だったなんて。」

「ん？どうかしましたかな？」

「彼らは、とても優秀な子たちですよ。私たち警察や、大人が相手でも、一歩も引かず、事件の全容を素早く組み立てて、推理し、犯人を見つけたす。卒業したら、すぐにでも警察に欲しい人材ですよ。」

「いや…、そんな、高校生になったばかりの子供に対して、買いかぶり過ぎじゃないですか？」

「何を言ってるんですか！？あれほど優秀な子たちはそうそう居ませんよ。工藤君以来…いや、それ以上かもしれません。」

「そっそんなにですか？」

驚きを隠せずにいる大友に対し、3人は大きく頷いた。

「貴方も、これから、あの子たちと行動を共にすれば嫌でもわかりますよ。彼らがどれほど優秀か。」

「彼らは、手掛けた事件は、確実に解決してくれるので、また、協力をお願いしますが、授業中は避けるので、安心して下さい。」

「は…はい。」

大友は、既に聞いた話だけで、頭がいつぱいになっていて、頷きはするものの、気はそぞろだった。

3人は、挨拶をすませると、呆然と佇む大友をそのままに、颯爽と教員室を後にした。

## 教師と刑事（後書き）

今回は、ゴールデンウィークの話です。

合宿？（前書き）

ちよっと長くなっちゃいました。

## 合宿？

5月2日 午前7時50分

探偵部の5人は帝丹高校の正門前にいた。

4人は私服に、1人は学校指定のジャージに身を包んでいた。

「おう！おまえら、俺はこのまま柔道部に行くけど、気を付けて行けよ。何かあったらメールしろよな！！」

元太は大きな声で言った。

「ああ、おめーも怪我しないようにな。」

「お土産買ってくるからね」

「柔道部、頑張ってる下さい。」

「貴方は何も心配せずに柔道に集中しなさい。じゃないと、怪我するわよ。」

コナン、歩美、光彦、哀と、それぞれが元太に声を掛けた。

「おめーらも、怪我しないようにな。休み明け、どんな事件が起きたか教えるよ。じゃあな！」

元太は言うだけ言うと、校内に向かって走って行ってしまった。

「…はは。アイツまで何か起きるって確信してやがる。」

コナンは、半ば諦めたような顔で呟いた。

「起きるでしょ？」

「起きますよね。」

「起きるわね。」

「おいおい…。」

3人に断定され、コナンは、がっくりと肩を落としてうなだれた。その時、

「みんな、おはよう。全員揃ってるな？」

と、顧問の大友がやってきた。

「「「おはようございます。「「「

「はい。大丈夫です。行きましょう。」

「じゃあ、出発！ところで、何が起きるんだ？」

大友は、駅に向かって歩き出しながら訊いた。

「え？」

「さつき、起きるって言うてただろ？」

「ああ、それはですね、何らかの事件が起きるって話してたんです

よ。」

「はあ？そんなもん、そうそうあるわけ無いだろう？」

「何言ってるんですか、起きますよ！絶対に。だって、コナン君が

居るんだもん！！」

「いや…、歩美ちゃん、そんなに力説されても。」

「先生、この合宿中に、私達のこと、少しは分かるんじゃないかし

ら？」

「この合宿の目的は、先生に俺たちのことを知ってもらうことなん

ですよ。」

「ん？そうなのか？」

「ええ、先生、顧問なのに私達のこと、何も知らないでしょ？」

「いや、少しくらいなら知ってるぞ。」

~~~~~回想~~~~~

警察の人たちが帰ったあと、俺は、しばらく呆然と立ち尽くしていた。

そこに、探偵部の4人はやってきた。

「あつ！！大友先生！」

「良かったです、ちょうど居て下さって。少しお話よろしいですか？」

吉田と円谷が、にこやかに話し掛けてきた。

俺は、その声で、やっと正気に戻った。

「え？あ、ああ……。どうした？」

2人の後ろでは、江戸川と灰原が少し訝しげな顔をしている。

「先生こそ、どうかなさいましたか？」

江戸川が探るような目で訊いてきた。

鋭いな。だが、警察の人たちが来たことは言わない方がいいだろう。

「いや？別に何でもないぞ。そっちの用は何だ？」

ごまかしきれてはいないだろうが、まあ、良いだろう。

「あ、はい。ゴールデンウィークのことなんですが、親睦を深めるために、合宿をしませんか？」

「先生に何の予定もなければですけど。」

吉田が上目遣いで聞いてくる。仕方ないなあって気になるのは何故だろう？

「特に予定はないが、いつだい？」

「5月2日〜4日。奥多摩に、私の保護者の友人が持つてるコテージがあるから、そこで。」

灰原は、的確に用件だけを言う子だな。

「分かった。許可しよう。当日は電車で移動だな。朝8時に正門に集合しよう。小嶋は無理だよな？」

「はい、彼は、ゴールデンウィーク中ずっと、柔道部の合宿がありますから。4人だけです。」

「そうか。分かった。じゃあ、今日はもう良いか？ちょっと調べ物をしないといけないんだ。」

探偵団について、少しでも調べていかなければ！

「そうですね。では、僕達も、警察からの呼び出しもないみたいなので、帰ります。失礼しました。」

「おう。気を付けて帰れよ。」

「はい！失礼します。」

よし、みんな帰ったな。

取りあえず、彼らの担任に訊いてみるか。

「阪東先生、ちよつとお聞きしたいんですが。」

「何ですか？大友先生。」

「先生のクラスの江戸川、灰原、円谷、吉田、小嶋の5人なんですが、彼らが、探偵部を立ち上げたのは知ってますよね？」

「ああ。小嶋の件で相談もされましたから。」

「元々、少年探偵団として活動をしてたつて聞いたんですが、何か知ってますか？」

すると、阪東先生は目を見開き、

「えっ！？彼らを知らないんですか？」

「そんなに有名なんですか？」

「ええ、それはもう！！特に江戸川です。彼は、工藤新一の遠い親戚らしいんですが、彼譲りの推理力は、警察ですら舌を巻くほどですよ。それに、中学に入るまで、あの、眠りの小五郎の下に身を寄せてたつて話です。」

阪東先生は、いつになく饒舌になっている。

「へえ、あの眠りの小五郎のねえ。そこで経験を積んだんですね。」

「そうですね！それに、灰原！！彼女も凄いですよ。大人すら知らないような、薬学・医学の知識で、江戸川の良きパートナーになつてるんです。あの2人は、他の3人とは、比べものにならないくらい、知識が豊富なんです。きっと、あの2人みたいのを天才つて言つんでしょうね。」

しみじみと言う阪東先生。

「それは……。」

もう、言葉すら出なくなつてきた。

「円谷と吉田も、頭の回転が速く、行動力もあるんですが、やはり、あの2人と一緒にいると、目立たなくなるんですね。小嶋は、あ



の中では、異質な感じですね。頭はあまり良くないが、行動力はあるんですよ。それに、柔道を始めてからは、犯人の確保で活躍するようになったとか。」

俺は、最後の言葉に度肝を抜かれて、つい、大きな声を出してしまっただ。

「犯人！？確保？？？えっ？彼らは、今までどんな事件に遭ってきただんですか？」

「あゝ、挙げたらキリがなさそうなんで、簡単に言いますが…、殺人、強盗、放火、誘拐、監禁等ですかね。」

阪東先生は苦笑してるが、俺には笑えない…。

「そっそうですか…。ネットとかで調べれば出てきますかね？」

「出ますよ。帝丹／少年探偵団で調べれば一発です。」

「そうですね。帰って調べてみますよ。」

その後、俺は、家のパソコンで調べてみたんだ。

分かったのは、彼らは尋常じゃないほど、事件に出くわしているってこと。それに、全てをちゃんと解決に導いている。

事件の詳細や、解決方法が、細かく載っているわけではなかったが、彼らがその場において、後に警察から表彰を受けているという事実は載っていた。

「これは…、俺、大丈夫か？まあ、しばらくは様子を見るしかないな。合宿中に彼らを観察して、今後の対応を決めるか。」

～～～回想終了～～～

「先生？何をボーツとしてるんですか？電車、出ちゃいますよ。」

「あっ？え？ああ、すまんすまん。」

数日前のことを思い出していた大友は、慌てて電車に乗り込んだ。

「それで？先生、何をブーツとしてたんですか？」

「いや、何でもない。」

「何でもないわけ無いですよ？僕達のことでしょうか？」

「…ああ。まあな。顧問なんだから、お前たちのことを少しは知っておかないと思うって、調べたんだ。」  
「おかしいですね。この前まで、全然気にしてなかったと思いましたが。」

「何か、調べようと思ったキツカケでも？」

「いや、別に。」

明後日の方向を見ながら言う大友に、

「警部たちが挨拶にでも来たんじゃないんですか？それで、興味を持った。」

呆れたような顔でコナンは言った。

「そうね。きつと、合宿の許可を取ったあの日ね。あの時から様子がおかしかったもの。」

哀は、コナンに頷きながら言った。

「でも先生、どうせ、調べたっていつても、誰かに聞いたとか、ネットですら調べたくらいでしょ？」

「それじゃあ、僕達を知ったことにはなりませんよ。今日からの3日間、よく見ていて下さい。」

歩美と光彦は、意味ありげに言っつて、笑顔を見せた。

「おい、それはどういう意味」

「あつ！次ですよ。降りるの。皆さん、準備して下さい！」

光彦は、大友が言い切らぬ内に言葉を発し、降りる準備を促した。

「コラッ！俺の話が途中でぞ！」

大友は怒るが、

「先生、そのうち分かるわよ。それまで待つて下さい。」

哀は静かに言った。

「ああ、先生は、俺達を見てるだけでいいんだ。」

コナンは真剣な様子で呟く。

「江戸川？」

「降りますよ。先生。後、バスで15分位です。」

「おい？さっきのはどういうことだ？見てるだけって…。」

話を逸らしたコナンだが、思いの外食い下がる大友に、ため息混じりで、

「言葉の通りですよ。夜にでも、哀と3人で話しましょう。」

「そうね。今後のことをいろいろとね。」

「あ…、ああ。分かった。」

そんな会話をしていると、バスが来た。

「さあ、これで、15分行ったところですよ！乗りましょう。」

光彦が先頭でバスに乗り込んでいく。

バスには、地元の人らしいおじいさんやおばあさんが、数人乗っていた。

5人は、邪魔にならないように、一番後ろに一列に並んで座ることにした。

運転席側から、大友、コナン、哀、歩美、光彦の順番だ。

他愛のない会話をしながら、バスが動き出すのを待っていると、優先席に座っていたおばあさんが、急に胸を押さえて苦しみだした。

「うううっ！！！」

「はっ！！哀！！！」

「ええ。」

それを目に留めたコナンは哀に合図をして立ち上がり、駆けつけた。

「もしもし？どうなさいました？苦しいのは胸ですか？」

哀は、おばあさんの横に膝立ちになり、背中をさすりながら話し掛ける。

「あ…ああ…。」

おばあさんは、うめきながらも、何とか頷いた。

「どなたか、この女性とお知り合いの方はいらっしやいませんか？」

コナンは、周りの人たちを見回しながら、話し掛けた。

「は、はい。友人です。」

1人の女性が手を挙げた。

「この方は、何か持病でもありますか？何か普段から薬を飲んでるかとか。」

「はい。心臓があまり丈夫じゃないと言っていました。」

「ありがとうございます。哀、荷物に薬が入ってないか？」

哀は、コナンに言われて、カバンに手を入れた。

「カバン、ちよつと失礼しますね。……あつ、あつたわ。」

コナンは振り向き、

「光彦、歩美ちゃん、水持ってないか？」

「あるよ。待ってて。」

歩美は、急いで鞆から、ペットボトルに入った水を取り出して、コナンに渡した。

「サンキュー！哀。」

「ありがと。」

哀は、水を受け取ると、おばあさんを支えながら薬と水を飲ませた。

「さあ、お薬です。慌てなくて大丈夫ですよ。ゆっくり、ゆっくり。」

：大丈夫ですか？ゆっくり呼吸して下さい。」

哀は、おばあさんに優しく声を掛けながら、落ち着かせた。

少しすると、呼吸が楽になったようで、弱々しいながらも笑顔で、

「すみません。ありがとうございます。」

とお礼をした。

「いえ。お気になさらずに。」

「大丈夫ですか？」

「おばあちゃん、手を貸すから、ゆっくりでいいんで、椅子に座りましょう。」

「さあ、手を。」

歩美と光彦は、おばあさんを両側から支えて、ゆっくりと椅子に座らせた。

「何から何まで、すみませんねえ。」

「いえ。お役に立てて何よりです。」

コナンが笑顔で言うと、

「でも、心配なので、近い内に病院に行ってください。」

と、哀も控えめな笑顔で話し掛けた。

「ええ。本当にありがとうございます。」

「どういたしまして。では、僕達は、次で降りるので、失礼します。お大事に。」

と言って、コナンたちは、自分たちのシートに荷物を取りに戻った。それを、一部始終、無言で見守っていた大友は、4人の的確な対応に戸惑っていた。

周りにいた大人たちも、驚いてる様子だった。

「先生、降りますよ。」

声を掛けられ、ハツとして荷物をつかみ、バスから降りていく。

その時、3人は、先ほどのおばあさんに軽く会釈をしながら降りていった。

しかし、コナンだけは、おばあさんの知り合いだという女性に、

「あの、申し訳ないんですが、まだ、本調子には戻れないと思うので、家まで送ってあげてもらえますか？」

と聞き、女性が、

「あ、はい。分かりました。」

と答えると、

「じゃあ、すみませんが、お願いします。」

と言いながら、頭を下げ、バスを降りていった。

そして、5人はコテージへと向かった。

合宿？（後書き）

合宿編、まだまだ続きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7741w/>

---

5人の高校生活

2011年11月10日01時15分発行